

社会構造を編制する欲望

—— ヴァイキング期ヨーロッパの場合 ——

(その1)

黒 石 晋

すべて総合の努力はたとえどれほど早計なものに見えようとも、あるがままの事実について率直に企てられるならば、必ずや史実探究に対して有益な働きをするにちがいない。—— アンリ・ビレンヌ

しだいに私には、ことは実証の問題ではなくて概念の問題なのだという感じがしてきた。—— イマニュエル・ウォーラステイン

I 主 題

中世北欧史の華は、何ととってもノルマン人の活動であろう。バルト海や北海はむろんのこと、グリーンランドから北アメリカに至る外洋へ、そしてロシアの内陸河川へと縦横無尽に雄飛した、かの海賊たちの活躍の時代である。実際、この時代のノルマン人の活動は、北欧史上あとにも先にも例がないほど大規模で活発なものだった。このため、彼らの時代（ほぼ8世紀～11世紀）は北欧史で“Viking Age”と特筆され、大きく突出した一時代をなしている。

そうだとすると、ノルマン人はなぜこの時代に、そしてこの時代だけに、あれほどまでに活動したのか。いやむしろ、なぜあれほどまでに“活動するパワー”を持ちえたのか”と問うべきかもしれない。本論考は、かかる“Viking Age”を、〈欲望論〉の立場から「ノルマン人の社会的・集合的な欲望のパワーが特異的に高揚した時代」ととらえ、その高揚の要因を理論的視角から演繹してみようという試みである。

II 分析の視角

いわゆる「ヴァイキング時代」を解明するために、そもそもわれわれはいかなる証拠・いかなる方法に依拠したらいいのだろうか。ノルマン固有の表記法、すなわちルーネ文字が発明されるのは「ヴァイキング時代」の末期に当たるため、彼ら自身の文献史料に多くを期待することはできない。したがって立証のためには、考古学的知見、および周囲の諸民族の文献に依拠することになる¹⁾。また、量的に十分でないこれら実証的証拠をつないでいく上で、適切な理論を援用することも必要である。実証的証拠は、時間的にも空間的にもヴァイキングの活動の「一点」を示すものにすぎないから、これらの「点」をつないで「線」とし、過程を再現して当時の社会構造を再構築するためには、どうしても理論に依拠することが必要となるからである。これは、古生物学者が「化石」という実証的証拠を「進化論」という理論によってつないでいく作業とパラレルなものである。

本稿では、このための理論としてとりわけ〈欲望論〉のアプローチを重視する²⁾。この〈欲望論〉の立場から見直すなら、前述した中世北歐史の主要主題は、「あのヴァイキング時代にだけ、ノルマン人の集散的〈欲望〉をかくも高揚させ、かつ、あのようにより組織化させた要因（社会・経済的条件）は何だったのか」という歴史社会学的な主題に置き換えることができる。

*

一方、実証的証拠として特に注目すべきは、考古学的出土資料としての〈貨

1) 北欧を中心とした出土貨幣に着目しつつ、アラブや西欧の史料を用いて「ヴァイキング時代」の経済史を大きなスケールで描き出したS. Bolin(1953)は、英語による北欧経済史全般の専門誌 *Scandinavian Economic History Review* 創刊号(1953年)の巻頭を飾った記念すべき論文であった。本論考は、この論文をおおいに参考にしてている。だがその後この雑誌には、今日までの50年近い間、ヴァイキング時代の経済史を扱った論文が一編も掲載されていない。このことは、ヴァイキング時代の経済史研究がいかに困難かを示唆しているように思われる。ヴァイキングの時代は、歴史学的文献考証のアプローチが困難で、したがって北欧ではほとんどもっぱら考古学者の専門領域になっているのである。

2) 〈欲望論〉の具体的内容については、拙稿(1997-2000)を参照。

幣〉である。出土貨幣はその刻銘によって、通例、年代や発行者の特定が容易である上、「一般的等価形態」として異文化間での比較の基準になりうるという利点をもつ。またその用途も、われわれにとって馴染み深いものである。したがって貨幣こそ、歴史的な文献史料に多くを望めない時代、あるいは国際比較などの際に、もっとも有用でかつ客観的な情報をもたらしてくれるものとなる。³⁾ S. Bolinは言う：「…違った時代、違った国の間で経済状態の直接的な比較を行うための基礎を本当に与えることのできる研究の型は、唯一つ、すなわち古貨幣学だけである。鑄貨史の資料は極めて豊富にある——鑄貨と何千枚かを含む鑄貨埋蔵である。…その鑄造時期は、何年というところまで確定することができる。少なくとも、相当に限定された期間の中で確定することができる。…鑄貨の鑄造された国を確定することは常に可能であり、極めて屢々その場所まで正確に求めることができる」と〔Bolin(1953=1975), p.137〕。

古生物学とのアナロジーでいうと、出土貨幣は、示準化石（地層の層準、つまり年代を示す）であると同時に、示相化石（当時の環境を示す）でもあるといえよう。つまり貨幣は、年代を教えてくれるのと同時に、その時代の社会・経済の状況を教えてくれるのである。

*

そしてさらに、本論考の理論的視座からすれば、貨幣は〈欲望の一般媒体〉である。本稿は、すでに述べたように、「社会的スケールで、ひとびとの欲望

3) 歴史社会学者J. L. Abu-Lughod は、“Historiographic”な研究（歴史構築）における方法論的困難を「data（資料）の問題」と「testimony and perspective（検証と視角）の問題」とに区分している〔Abu-Lughod(1989), pp.24-32〕。彼女のいう「dataの問題」とは、時代や文化ごとに記録保存さるべきと観念される内容が異なるため資料の存否が異なる上、記録の方法、詳細さや信頼性等が千差万別であるため、一貫した比較の基準に堪えるcomparable dataを得るのがそもそも難しいこと。一方、「testimonyの問題」とは、仮にdataが得られたとしても、そのdataと“実際の世界”との間に記録者の立場等に起因するギャップがあること、また「perspectiveの問題」とは、いかなる視角によってかかるギャップを判断するか、という困難である。このような困難は、異なる時代、異なる文化を文献史料によって比較し大きな社会構造を再構築しようとする企図に対し、つねに立ちはだかる困難である。かかる困難に対して、本論考はこのあとで「貨幣」に依拠する「歴史構築」を試みるが、「貨幣」というdataは、これらの問題を一貫してクリアする、きわめて例外的な準拠点なのである。

「がいかに挙動したか」を問題にする〈欲望論〉の理論的論考である。この意味での「欲望の挙動」を示す、もっとも重要な理論的指標が、貨幣なのである。つまり貨幣こそ、理論と実証とを直接に結ぶ鍵である。われわれは、貨幣の動向に着目することによって、理論・実証の両面から欲望の編制（上述した主題）を解き明かすことを試みよう。

Ⅲ ヴァイキング時代の貨幣と商品：その実際

ところで、ヴァイキングとはそもそも何者だったのか。たとえば、しばしば「ヴァイキングはいったい商人であったのか、それとも略奪者であったのか、決定することは困難である」といわれる〔Kulischer(1928=1974), p.148〕。あるいは、真相は「商人か海賊か」の二者択一でなく「海賊行為こそ商業の第一段階」〔Pirenne(1933=1936), p.22〕という表現に近いのかもしれない。つまり敵対的略奪か平和的交易かの相違は、その時点での状況の違いに応じて“どちらが得か”の判断の違いでしかないということである。そしておそらく、〈囚人のジレンマ〉ゲームから示唆されるように、略奪の戦略（他者を欺く裏切り）は短期的には利益が上がっても、接触が繰り返される場合には不利（相互の裏切り、全面紛争）となり、長期に学んで、交易（ないし信用、つまり協力解）へと進展するのであろう。これがすなわち「海賊行為こそ商業の第一段階」なる命題の理論的含意である。しかし、経験からそのことを学んでもなお、双方の協力による平和的交易が永続するとは限らず、略奪（裏切り）もまたしばしば行われた。協力解は所詮、短期的視野になれば不安定だからであろう。いずれにせよ交易と略奪とは、状況に応じて相互に入れ替わる、互換戦略であるらしい。そう考えれば、商人か海賊か、というヴァイキングの行動も、同じ〈欲望〉の現れ方の相違として一貫した視野の中で捉えることができる。

*

さて、まず前述の方針にのっとり、これまでに知られている貨幣関係の考古学的事実を確認しておこう。

スカンディナヴィアで発見されるヴァイキング関係の最初期の出土物の中には、7世紀前半のササン朝ペルシアの〈ディルハム Dirham〉銀貨⁴⁾が少なからず存在することが知られている〔Pounds(1974), p.87〕。このことから、7世紀までにノルマン人はバルト海に注ぐいくつかの河川⁵⁾を遡ってヴォルガ河・カスピ海を経由する交易ルートを見い出し、ペルシア地方との接触を開始したものと見られている⁶⁾。

むろん、その最初期において、かかる接触は偶然に発見されたものであったろうし、またノルマン人が単独でこの交易ルートをすべてカバーしたわけではなく、中間にさまざまな中継商人（ハザール族、ブルガル族やユダヤ、シリアの商人たち）を介してペルシアや中央アジアに至る、間接的接触であったには違いあるまい。M. M. ポスタンはいう、「…バクトリアのトランス・オクシアンの地やペルシアのトランス・カスピアの地方へ彼ら〔ノルマン人〕がみずから入り込んでいたかどうかは、われわれには分からない。しかし、少なくとも彼らがアジア草原地帯の周囲に接触して、ハザール族やヴォルガ中下流域のブルガル族と交易していたことだけは間違いない」〔Postan(1952), p.180〕と。

*

そしてこれに続く8世紀以降の北欧では、多くの埋蔵庫（hoard）⁷⁾から夥し

4) 〈ディルハム Dirham; d-r-h-m〉とは、古代ギリシア～ヘレニズム期の〈ドラクマ Drachma; d-r-ch-m〉に由来し、オリエント地方で広く銀貨を指す呼称である。アケメネス朝期、銀貨は〈シグロス Siglos〉と呼ばれていたのだが（“siglos”とは「銀」の意）、アレクサンドロス大王の遠征によって、ギリシア風の呼称が普及したのである。

5) 600年頃、西ドヴィナ河（Zapadnaya Dvina；ラトヴィア人はダウガ河 Dauga と呼ぶ）に現れたことが知られている。西ドヴィナ河は上流まで奥深く可航な河川で、その源流部はヴォルガ河の源流に近接している。ヴォルガを下れば、カスピ海を経てペルシア地方にアクセスするのは船人にとって容易なことである。

6) リゾームは、一般に偶然の〈接触 contact〉から持続的な〈接続 connexion〉へと進展する。このことは、販路においても真である。この点、拙稿（1997-2000）、特に第320号を参照。

7) 「埋蔵庫（hoard）」という語は「貯蔵庫」と訳されることもあり、定まった日本語訳がないのが現状である。とまれ、緊急時や一時的保管…等々のため、所有者が貨幣や財宝を意図的に地中に埋めたものがその後掘り戻されず埋蔵された状態になったものをいい、古代・中世における貨幣の主要な出土形態である。わが国と比べヨーロッパではその存在が非常に多く、たとえばイギリスでは「…ブリテン島だけで毎年およそ3万個が発掘されている」〔Burnett(1991=1998)p.7〕。古代・中世のヨーロッパでは、埋蔵庫の研究だけで

量のイスラム貨幣（ウマイヤ朝～アッバス朝期のディルハム銀貨が圧倒的に多い）が出土するようになるほか、銀貨から改鑄されたと見られる銀の装身具⁸⁾や銀器などが大量に見出されるようになる。このことから、ヴァイキング時代は〈銀の時代 Silver Age〉とも呼ばれるほどである。その規模がまた驚嘆に値するもので、「…8世紀から10世紀にかけてのヴァイキングの貯蔵庫でイスラム諸国の銀貨が何十万個も存在するという事は、ヴァイキング商人の東進の規模を物語っている」〔Burnett(1991)p.48/(=1998)p.82〕。「…スカンディナヴィア人によるオリエント貿易がいかに大きな規模のものであったかは、スカンディナヴィア半島、とくにスウェーデンあるいはかれらが頻繁に往来していた地域で大量のアラブ貨幣が発見されていることからわかる。スカンディナヴィア人が定住していた地域では、1700もの個所で貴金属や貨幣が発見されており、一カ所平均およそ300個の貨幣がみつまっている。しかもすでに発見されたものは、全体のほんの一部でしかない」〔Postan(1970=1979), p.159〕。そして「…鑄貨埋蔵の地理的分布は、北はノルウェー及び北スウェーデンから南はシュレージェン及びウクライナまで、西はシュレスヴィヒ・ホルシュタイン及びメクレンブルクから東はウラルまで、ひろがっている。そこでは、アラブ鑄貨の埋蔵は何百となく数えることができ、しばしばそれは極めて多数の鑄貨を含んでいる。…確実に知られている最大の出土物は十分に印象的である。その内容は、11,000枚以上のディルハムと数を決定しかねる程に多数の破片であり、重量は65ポンド以上であった。800とか900、あるいは2,000とか3,000のディルハムを含んでいる鑄貨埋蔵はざらである」〔Bolin(1953=1975), p.169〕。

この大量の銀をどう解釈すべきか。専門家の見解には対立がみられる。一方

↘貨幣史が成立すると言って過言でない（その他、貨幣発見の重要な機会として、副葬品としての埋葬や難破船の発見などもある）。

8) 銀の装身具としては、リング状をした通常の腕輪（ネイティヴ型）に加えて、考古学者が〈ペルミ型 Permian type〉と呼ぶスパイラル状のプレスレットも多く出土する。これは元来、肘よりも上に着ける腕輪だったと考えられているが、もともとヴォルガ河地方の出土品に特徴的なタイプであることから（「ペルミ型」とは、ウラル山脈の西麓、ヴォルガの支流カマ河に臨む都市ペルミの名にちなむ）、ヴォルガ河地方から輸入されたものであることに疑いがない〔Clarke & Ambrosiani(1995), p.170〕。

9) Clarke & Ambrosiani(1995), p.168。

には、何度かの襲撃で略奪した戦利品にすぎず、日常的流通や交易に重要な意味を持つものではない、という慎重な見解が存在し、他方には大規模交易の存在を積極的に肯定する挑戦的な見解が存在するのである〔Clarke & Ambrosiani (1995), p.168〕。ここにまたもや、海賊か商人か、という見解の相違がかいま見られる。後者の見解は、さらに進んで、大量の銀は北歐圏（ノルマン人）とイスラム圏（アラブ人、ソグド人など）との間の交易関係が定着し、しかもそれがノルマン側の大幅な出超（黒字）であったことを想定する¹⁰⁾。つまり、もともと偶然に発見された初期の〈接触〉が、結果として双方の欲望に適合し、さらなる欲望の供給を受けて発達し、欲望を適切に整流・調整しつつたく定常的な〈接続〉へと“進化していった”のだ、と解釈することが可能となる。

*

この二つの見解のうち、前者は、乏しい史料の現実¹⁰⁾に則した「慎重な見解」であるわけだが（何かを言おうとすると史料はつねに乏しいものである）、見方を変えれば“小心timidな見解”と紙一重でもある。また後者も「挑戦的な見解」といえば聞こえはいいが、これとても一歩間違えば“誇大grandioseな見解”になりかねない。むろん、現実の世界での裏付けを欠く理論は空理空論に過ぎず、また理論的見通しのない史実だけでは設計図を欠く部品の山に過ぎないから、両者を併せ持つのが理想である。だがそれでも、限られた根拠の上に論者の拠って立つ立場は「実主理従」か「理主実従」かのどちらかにならざるをえない。これが臆病小心か誇大妄想かの究極の選択なのだとすれば、ことは実証の問題というより、概念の問題、視点／考え方の問題なのである。この点でいえば、考古学者や歴史家は前者を、理論家は後者を取る傾向があるし、また実際、そうすべきであろう。考古学者は、たとえ小心といわれようとも、発掘資料にもとづく慎重な論を展開すべきであるし、理論家は、たとえ誇大といわれようとも、一定の仮定のもとに（この仮定を明示することが特に重要である）理論展開を行って“失われた環”¹¹⁾を復元すべきなのである。換言すると、

10) 当然のことであるが、物々交換（バーター）の経済なら、必ず等価交換と観念されているはずで、そもそも「出超」や「入超」などという事態がありえない。「出超」や「入超」は貨幣経済（ないし信用経済）を大前提としているのである。

発掘家や読史家は資料に立脚した「妥当な結果」を是とし、理論家は理論の展開による「意外な結果」を好む。それが立場による宿命なのである。¹²⁾

*

さて、「大胆な見解」が想定するような、劇的な「出超」がノルマン側に存在したとするなら、ノルマンからイスラムへ輸出された品は何だったのだろうか。実のところ、この問いがまたすでに、ヴァイキング時代のもっとも困難な問題のひとつとして研究者の行く手を妨げてきた問題なのである。つまり「貨幣」が大量に残存しているのに、その相方としてあったはずの「商品」の方が十分には分かっていないからである。ノルマン側の固有産品は、おもに獣骨や角などの加工工芸品、水鳥の羽毛、毛皮や皮革といった品々だったと推測されてはいるが、これらは何よりも「消費される」ためのものである上、素材の点からいっても、貨幣のような貴金属と比べ考古学的証拠として残りにくい〔Clarke & Ambrosiani(1995), p.167〕。このため交易品の出土証拠は元来僅少であるばかりか、将来においても多くを期待できないのである。また前述のごとく文献史料も乏しい。だから結果として歴史学者や考古学者は、慎重に「ノルマン・イスラム交易の中身は分からない」との立場をとらざるをえない。¹³⁾

11) 西洋中世史家、増田四郎は、歴史把握の難しさに関連する「忘れ得ぬ言葉」として次のような言葉を紹介している：「…マルク・ブロックは、あのフランス農業史をまとめた名著の冒頭で、『もともと推測によってしか再構成できない歴史のことであるから、ものごとの原因と結果とを、あまりにも正確に計量するということは、きわめて困難である』と説き、歴史家たるものは、はじめからあまり『大望』を抱いてはいけないと警告している。ところがこれに反してマックス・ウェーバーは、歴史事象のそもそもの起源やその発展のすじみちは、いろいろ複雑きわまるものであって、仲々見分けがつかないものであることを充分承知の上で、しかもなお『科学的認識に役立つ点において、卓抜にして慧眼な誤謬というものは、愚鈍にしてなんの生彩もない正確さよりも、はるかにまさっている』という歴史研究の『真理』を忘れてはならないと強調しているのである」〔増田(1974), p. 436〕。この2者の見解の相違は、帰納と演繹というふたつの方法論的立場の相違を表している。そしてそれはただちに、ブロックが歴史家であり、ウェーバーが理論家であるという相違なのである。

12) 確認しておく、本稿で筆者が意図しているのは、まず第一に「欲望理論」の展開による論理的演繹である。そしてこの作業が空理空論に終わらぬことを確認するため、副次的に、現実の社会（歴史）に照合してマクロな社会構造を復元構築することを試みているのである。つまりここでの筆者の立場は「理主実従」である。

13) 本稿では、以下ノルマンとイスラム、ノルマンとフランクの交易について、実際に交易された財が何であったのかを可能な限り考察していく。しかし欲望理論の理論面からノ

逆にだからこそまた、前述の大量の発掘銀貨を前にしてもなお、これを「交易の証拠」と捉えることがためらわれるのである。

しかし本論考は、(脚注12に述べたように)社会経済の理論(欲望論)を歴史の文脈に適用することで社会経済の流れを再現する〈演繹的〉な試みである。ここでは、理論的な推論と仮定を交えて大きく踏み込むことにしよう。

*

ノルマンとムスリムとの交易に関し、大胆な推論を交えてしかも説得的に論じたことで知られるS. Bolin (1953=1975)によれば、この時代、ノルマン側からイスラム圏へ輸出された物資で圧倒的に重要な品目(大量に流入した銀の代償)は奴隷と毛皮だったという。交易の主たる中身が奴隷だったのだとすれば、考古学的発掘で現れないのもやむをえないところであろう。

そうだとすると、それらの輸出産品をノルマン商人はどうやって調達したのだろうか。毛皮はスカンディナヴィアで自ら生産したものを多少輸出していたにしても、奴隷は決してそうではなかったようである。つまりノルマン人は、主にバルト海の東～南部に居住していたスラヴ人を略奪して毛皮を強奪し、かつ捕虜とした人間を奴隷としてムスリム商人に売却していたらしいのだ[Bolin (1953=1975), pp.177ff.]。ノルマン人の初期の遠征の目的は、自分たちのための奢侈品を強奪することもさることながら、それ以外に、アラブ向けの輸出産品(奴隷、毛皮)を調達することだったのである。

*

ところで、前出ポスタンの引用文に現れているように、ノルマンとイスラムとの交易を中継したといわれるトルコ系の遊牧民ハザール族(Khazars; 中国の記録ではく可薩)は、ノルマンよりもさらに文献史的・考古学的な証拠が乏しく、歴史上「謎の民族」とされている。¹⁴⁾ 乏しい文献によって知られている

14) いうと、財が何であったのかは、実はどうでもよいことなのである。財はもちろん何かではあるのだが、何であってもよいのであり、それよりもむしろ欲望の媒体としての貨幣(銀)の流れがどうなっているのか、これが実証されれば十分なのである。これがく貨幣の一財理論)の立場である。この点、拙稿 黒石 (1997-2000)、特に第310号を参照されたい。なお後述の脚注25をも参照。

ところによれば、彼らは支配氏族「阿史那氏」を頂点として、7世紀頃、黒海北岸からカスピ海北岸にかけての草原地帯で遊牧民の支配者となった。この「阿史那氏」は6世紀半ばに中国北方から中央アジアにかけての広大な草原を支配した突厥可汗国の支配氏族と同根という。ハザール族は東西あるいは南北¹⁵⁾を結ぶ交易の感覚にすぐれていた。そして驚くべきことに彼らは9世紀までにユダヤ教を受容している。

ハザールの首都イティル (Itil) はヴォルガ河がカスピ海に注ぐデルタ上に築かれ、¹⁶⁾カスピ海を経由してやってくるムスリム商人とヴォルガ河を下ってくるノルマン人やブルガル人などとの交易で繁栄した (イスラム教徒はカスピ海を「ハザールの海 Bahr Al-Khazar」と呼んだ)。

*

一方、もともと黒海の北岸にいたアジア系遊牧民のブルガル族 (Bulgars) は、ハザール族の西進によって二派に分裂、アスパルフ汗に率いられた一派は西へ進んで黒海の西部に定着し (679年)、ドナウ＝ブルガリア国家を建国して現在のブルガリアの始祖となった。また別の一派はヴォルガ河を北上し、カマ河との合流点付近に首都ボルガルを築いてカマ＝ブルガリア国家を建国した。この後者の地は河川の水運を利した東西の中継貿易で栄え、特にノルマン人とムスリム商人との重要な交易拠点のひとつになっていく。「…スウェーデン人は、バルト海を渡って各地の交易市場、とくにヴォルガ川中流のボルガル

14) ハザールに関する文献資料は限られており、すべてを挙げては城田俊(1996), pp.216-8に記されているものだけのようである。一方ハザールの考古学はその地理的特性から旧ソ連の独占状態であったため、西側になかなか知られなかったが、発掘の成果はある程度上がっているらしいので今後の展開が期待される。

15) ビザンツ帝国はユスティニアヌス帝時代以降、養蚕と絹紡績・絹織物工業で栄えたが、これはもともとネストリウス派の僧が中国の禁輸品であった蚕卵を中央アジアから黒海北岸経由でもたらしたものと いわれる [Runciman(1952), p.90]。これはビザンツの宿敵であったペルシア人を回避する、中国との交易ルートであり、それを提供したことはトルコ系ハザールの貢献にはかならない。この点、城田俊(1996) pp.172ff. を参照。

16) 今日のヴォルガ河は、当時広く「イティル河」と呼ばれていたらしい。なお、ハザールの交易都市としては9世紀後半からドン河下流に築かれたサルケル (Sarkel; 834年建設) が繁栄してゆくが、この傾向は、《9世紀の半ば》以降のハザールで「ヴォルガ河＝カスピ海＝イスラム」の交易が衰退し代わって「ドン河＝黒海＝ビザンツ」の交易が興隆したと無縁ではないと考えられる。

(Bolgar) にまで姿を現すようになっていた。こうした市場では、スウェーデン人たちが北ロシアの森林地帯で手に入れた毛皮や奴隷を、イスラム教徒が争って買い求めた。」〔Barraclough ed. (1978=1979), p.110〕

*

さて、北欧の大量の出土貨幣を交易の証拠として率直に解釈すれば——それがハザールやブルガルを中継したにせよしなかったにせよ——，ノルマン＝ムスリムの直接間接の交易はかなりの規模のものに発展していたと考えてよいだろう。そしてその交易商品の中身は詳らかではないが、奴隷や毛皮だった、というのが有力ということである。

ところが、北欧におけるイスラム銀貨の出土は、なぜか《9世紀の半ば》¹⁷⁾を転機として終焉に向かう〔Pounds(1974), p.87〕。そして北欧の埋蔵庫においては、9世紀までのそれからは完全な形のイスラム銀貨や装身具が出土するのにも、10世紀以降のそれからは切断された断片銀塊（いわゆる“hacksilver”）しか見出しなくなるのである〔Clarke & Ambrosiani(1995), p.168〕¹⁸⁾。

このことは暗に、地理的な意味での北欧と中東との交易（＝欲望の流れ）が《9世紀の半ば》を転機として急速に衰退したことを物語っている。その途絶の要因は詳らかでないが、N. J. G. Pounds は、ペチェネグ族（カスピ海北東方にいたトルコ系といわれる遊牧民族でハザール可汗国の支配下にあった）の西方への侵入によって交易のルート（いわば「欲望のリゾーム」）が切断されたためではないかといひ〔Pounds(1974), p.87〕、J. Edwardはアッパース朝の内部で820～830年頃に発生した政治的混乱のためだといひ〔Edward(1988), p.106〕、またH. ClarkeとB. Ambrosianiによればイスラム圏での銀の産出（特に東方の諸銀山でのそれ）が減じたためだといひ、これは10世紀半ばまでに枯渇したのだという〔Clarke & Ambrosiani(1995), p.170〕。いずれにしても、

17) 「9世紀の半ば」という時点は、西欧・北欧史上非常に重要な転機として以下しばしば現れる。それゆえ注意を喚起するため、以下《 》で括って示す。

18) この「断片銀塊」は、貨幣や装身具が切断された二次的なもので、もともとの形に製造されてから時間が経過していることを暗示していると同時に、もはや装飾品ではないことも明白である。その実態はおそらく、装身具としていったん退蔵された銀が秤量貨幣として放出されたものであろう。なお、北欧では携帯しうる天秤も多く出土する。

この交易の途絶に関して、ノルマンの側には明確な内的要因が見い出されていない。

*

興味深いのは、この対イスラム交易の縮小とほぼ時を同じくして（《9世紀半ば》以降）、ノルマン人が西欧～ロシアへの拡大侵略をいっそう強めていった、という事実である。

むしろ、ノルマン人の遠征略奪は、それ以前にも盛んに行われていたのだが、《850年頃》を境に、遠征の性格が顕著に異なってくるのである。すなわち、それまでの侵攻が“略奪し退却する”スタイルだったのに対して、それ以降は“占領し定住する”スタイルに変容していったのである。堀米庸三と木村豊によると、「一般にノルマンの活動の型を大づかみに二分すれば、初めのうちは農閑期の夏を利用して侵入や掠奪を試み、冬季海の荒れる前に本国へ引揚げるといふ、言わば『出稼ぎ型』が支配的であり、毎年定期的に反復される波状攻撃の性格を帯びていたが、やがて850年前後からは、河口や海岸の集落に半ば恒久的な前哨基地を設営して越冬し、これを足場にさらに奥地深く浸透する『征服型』が優勢になった」〔堀米・木村(1969), p.292〕。これは、ノルマン人の〈欲望の発現形態〉が《850年頃》を契機に大きく変容したことを示唆している。しかもそれは、ロシア平原から西欧、大西洋に至る広汎な地域で共通の現象だった。

具体的に史実を確認すれば、まず西方では、アングロ＝サクソン人のウェセックス王国によっていったん統一されたイングランドに対し850年頃からデーン人（デンマーク系ノルマン人）の侵入と占拠が始まり、886年にはウェセックスとデーン人の間でイングランドを分割領有することが定められた（デーンロー地域の成立）。その後アングロ＝サクソン人とデーン人による確執が続いたのち、1016年にはデーン人の支配（カヌートの北海帝国）が成立、一時サクソン系王家が復帰したものの、結局1066年に最終的なノルマン王朝が樹立された。アイスランド島がヴァイキングによって発見されたのは870年頃と推定され、930年頃までに島の海岸部を中心に1万人ものノルマン人が移住したという。

フランスでは885年にパリが包囲され、結局911年にデーン人の酋長ロロがフランス国王からノルマンディ半島の領有を認められている。

東方では、ロシアを征服したノルマン人（ルーシ）が862年にノヴゴロド王国を、また882年にキエフ公国を建国して支配者となり、ここからドニエプル河を下ったノルマン人が885年、コンスタンティノーブルを攻撃している。これ以降、彼らの主要交通路は（ヴォルガ河～カスピ海経由でなく）ドニエプル河・ドン河から黒海を経由するルートに移り、これと同時にノルマン人の東方での交易相手もイスラム勢力（カスピ海経由）ではなくビザンツ帝国（黒海経由）へと移っていく〔Pounds(1974), p.87²⁰⁾〕。

つまるところ《9世紀の半ば》頃、ノルマン人の社会に何かが起こったらしいのである。

*

かかるノルマン人の「海外への雄飛」は、北欧史上、前述のごとく、あとにも先にも例がないほど大規模なものであった。通説的には、この海外移住の要因を、故地スカンディナヴィアにおける人口扶養力（農業生産力をはじめとする基礎的条件）が人口の増大を支えきれなくなったため、と解することが多い²¹⁾。そしてそれはおそらく正しい。しかしそうだとすると、いや、そうだとすればなおさら、この時代になぜ、自然な扶養力を越えるほどにノルマン人の人口が増大したのか、その理由が問われなければならない。常識的には、人口の増大²²⁾

19) ただし、このリュウリックによる有名なノヴゴロド王国建国（862年）は、単なる伝承として、今日歴史学的意義を認めないのが通例となっている。

20) スカンディナヴィアでビザンツ帝国の金貨（ノミスマ；旧称ソリドゥス）が発見されるようになるのが、まさに《9世紀半ば》以降なのである。逆に、それ以前のビザンツ金貨はスカンディナヴィアにはほとんど見出しされない〔Pounds(1974), p.345〕。このことは、《9世紀半ば》以前にイスラム銀貨が際立って多いことと対照的で、《9世紀半ば》を転機に、ノルマンの交易相手がイスラムからビザンツに移ったことが推測されるのである。

21) その見解の代表としてM. Bloch(1939=1973), p.41や M. M. Postan(1952), p.178などがある。

22) リン・ホワイト・Jr. は、この生産力の増大を、ヨーロッパ北部に7世紀頃普及した〈重量犁〉によるものと推論している。これによって、北欧の重たく湿った厄介な土がむしろ肥沃な農地に転換したというのだ。いわく、「スカンジナヴィアへ新型の犁（引用者注：重量犁）が導入された年代はまだ不明であるけれども、それが人口を増大させた結果が、800年ごろから始まるヴァイキングの移住となってあらわれたのではなかろうか」

は自然な扶養力の範囲内にとどまるはずだと考えられるからである。そしてさらに、ここで求められるべき解答は、それまで増大した人口を、なぜ《9世紀半ば》に突然養えなくなったのか、この説明をもクリヤするそれでなければならない。

IV イスラム圏における貨幣の動向

われわれはここで、「ノルマン人の海外征服」と正確に時代が一致している、9世紀半ばにおける「対イスラム交易の縮小」について再検討してみることにしよう。そして今や、イスラムとノルマンとの交易の推移（欲望の推移）には、決定的に重大な要因がイスラムの側にあったことを知らなければならない。手がかりとなるのは、イスラム・カリフ国 (Caliphate) の内部における経済情勢、とりわけ貨幣の動向である。

*

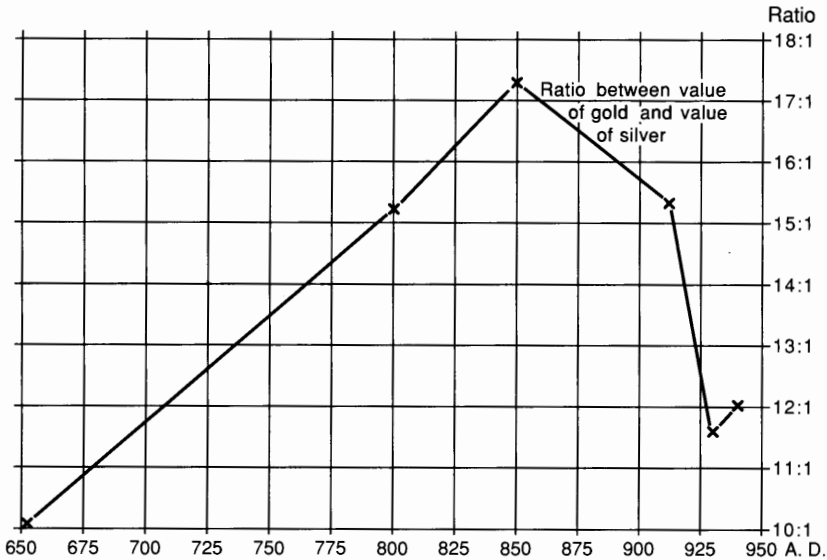
S. Bolin (1953) がアラブの史料を用いて明らかにしたところによれば、カリフ国の国内における金銀比価は650年頃の約1:10から《850年頃》の約1:17へと傾向的に銀の価値を減じ、逆に《850年頃》以降は銀高に転じて941年には約1:12にまで回復するという急カーブを描いている（グラフを参照されたい）。ここで、《850年頃》という、まさに北欧史の一大転機に当たる時期が、アラブ側の金銀比価の転換点に一致していることは注目に値しよう。

*

Bolin は、まずイスラム圏で《850年頃》まで継続した銀安の原因について、8世紀初頭からカリフ国東部の辺境に大銀山が発見され大量の銀が供給されたことにある、という [Bolin (1953=1975), p.154]。この大銀山開発の端緒はトランスオクサニア地方²³⁾のシャーシュ (Shāsh)²⁴⁾ 銀山で、次いでホラーサーン地

と [Lynn White Jr. (1962=1985), pp.72f.]。しかしそれが正しいとしても、この〈重量型〉はホワイト自身述べているように当時きわめて高価なものだったから、それを導入しえた北歐人の経済力の源泉が何だったのかについて、さらなる検討が必要なのである。

23) 「トランスオクサニア」(Transoxania) はまた「トランスオクシアナ」(Transoxiana) と呼ばれることもあるが、いずれにしても「オクスス川 (Oxos; アラル海に注ぐ川で今日の阿姆ダリア川) の彼方の地」の意味で、西方から見た呼び名といえる。この地はメ



(出所：Bolin(1953), p.16より抜粋)

方（現在のイラン北東部からアフガニスタンにかけてのヒンドウークシュ山脈地方）のバンジャヒール（Banjahir）に大銀山が開かれた。これらの銀山から供給された銀の量は驚くべきもので、800年頃のカリフ（栄華をきわめたハールーン＝アル＝ラシードの時代）の銀収入の総額はおよそ4億ディルハムにのぼったといい、これはザクセンやボヘミアの銀山が最盛期であった1500年頃の推定世界総生産額の約25倍にも相当する、まさに驚異的な数字なのである〔Bolin(1953=1975), p.153〕。

Bolinは、銀が豊富に産出した、この中世前期の銀の時代を「東方の銀の時代」と呼び、700年後に訪れる「新大陸の銀の時代」に対比している。

*

ㄨ 「ソグディアナ」(Sogdiana) という固有名で呼ばれる土地にほぼ一致しているが、この地を拠点として活動したのが商業民族ソグド人である。

24) 「シャーシュ」とは、今日のウズベキスタンの首都タシケントの古名である。タシケントは中国の記録に「石」という表記で現れるが、これは「シャーシュ」を音訳したものである。

かくも大量の銀が供給されれば、銀の暴落は当然の帰結だったといえよう。しかも上述した金銀比価はカリフ国内での標準的な動向であって、国の東方、それも銀産地近傍での暴落はいっそう深刻だったはずである。Bolinは、アラブで編集された『ヤークートの地理辞典』を引いていう：「バンジャヒールの…住民の使うディルハムは大きく、かつ豊富である。1ディルハム以下では何も買うことができない。一束の野菜さえ買うことができない」〔Bolin(1953=1975), p.151〕と。かかる銀安の条件下では、相対的に銀を高く評価する国外の民があれば、彼らとの交易が欲望されたであろうことは想像に難くない。²⁵⁾これがノルマン人やフランク人との交易を欲望する、イスラム側からの強力なプッシュ力として作用した、と考えてもあながちの外れではあるまい。とりわけ北欧は、ヨーロッパ諸国のうちで、この東方の銀産地への最短距離にあたり、しかもその間にはロシア諸河川の巨大な水運の便があったのである。

*

さて、では逆に、《850年頃》以降のカリフ国における銀高の要因は何だったのだろうか。考えられているのは、銀産地として重要であったホラーサーン地方にターヒル朝(820~872)とサファール朝(867~900)、またトランスオクサニア地方にサーマーン朝(874~999)という事実上カリフ国から独立した勢力が成立し、これら諸朝が銀産地を領有して首都バグダードとの間の「銀への欲望の道」が切断されたこと、および《9世紀の半ば》過ぎに古くからの金産地ヌビア地方(エジプトの南方)がアラブ人によって征服され、ここに新たな金鉱が発見されたこと、である〔Bolin(1953=1975), pp.154-155〕。このヌビア金山の繁栄がまた特筆すべきもので、「…アラブ人による征服の後、この地方は非常に繁栄して、海路による補給の他に、アスワンから食糧を運ぶのに、

25) 手持ちの銀が暴落しつつあるとき、商人はその価値を守るため、かかる銀を高く評価する他民族に銀を押し付け、相対的に価値の高い財を得ようとする。19世紀末の銀暴落期に欧州列強が中国市場(銀本位)へ殺到したのも、これと同じ経済現象である。この点、拙稿 黒石(1997-2000)、第324号を参照。そしてこのような場合、銀の代償として「何を」得ようとするかは、むしろ二の次となってしまう。特定の財を得るために確信をもって交易するというより、漠然と「何か価値のあるものを」得ようとするのである。かかる「対象の不確定性」は、未分化な〈欲望〉の典型的な発出形態である。

60,000頭もの駱駝が必要であった程である」〔Bolin(1953=1975), p.155〕。また、東方の銀鉞山がその産出を減じたこともおおいにありうるだろう。

ともあれこのように、カリフ国内ではまさに《9世紀の半ば》を転機として、銀が高騰に転じ、これに伴ってひとびとの —— とりわけアラブやソグド商人たちの —— 欲望の媒体(=貨幣)が「銀から金へ」、大きくシフトしていったのである。そして、相対的に豊富化した金をベースとして、10世紀初頭のカリフ、アル=ムクタデフィルの時代、カリフ国は事実上、銀本位から金本位に移行する。

*

9世紀の半ばのイスラム圏における、このような経済情勢の急変(銀安→銀高)は、対外交易にも重大な変化を及ぼさずにはおくまい。すなわち、ここでノルマン人との交易に限っていうならば、ペチェネグ族による交易の妨害やアッバース朝内の政治的混乱もさることながら、カリフ国は、対ノルマンの交易ルートからそれまで同様の商品を、安価な銀による優越的な条件で購入できなくなった、ということである。それまでの時代とはうって変わって、銀が北欧に流出しなくなったのである。もし安価な銀が豊富に供給される、という条件が変わっていなければ、ペチェネグ族が交易を切断したとしても、また政治的混乱があったとしても、早晩、伶俐な商人たちの欲望がそれを回避するルートを見つけたことだろう。販路は少々切断されても自己再生する、しぶとい〈リゾーム〉なのだから。

(続)

[参考文献]

- Abu-Lughod, Janet L. (1989) : *Before European Hegemony: The World System A.D.1250-1350*. New York, Oxford Univ. Press.
- Barracrough, Geoffrey ed. (1977) :
(=1978) 『朝日=タイムズ世界歴史地図』朝日新聞社。
- Bloch, Marc (1939) : *La société féodale*. Albin Michel.
(=1973) 新村猛ほか訳『封建社会』2巻, みすず書房。
- Bolin, Sture (1953) : "Mohammed, Charlemagne and Ruric," *Scandinavian Economic History Review*, Vol.1, pp.5-39. [English translation from: "Muhammed, Karl den store och Rurik," *Scandia*, XII (1939), pp.181-222.]
(=1975) : 佐々木克巳訳「マホメット, シャルルマーニュ, 及びリユーリック」, 佐々木克巳編訳 (1975) 所収。
- Bolin, Sture (1954) : "Tax Money and Plough Money," *Scandinavian Economic History Review*, Vol.2, No.1. pp.3-21.
- Burnett, Andrew (1991) : *Coins*. British Museum Press.
(=1998) 新井佑三訳『コインの考古学』學藝書林。
- Clarke, Helen and Björn Ambrosiani (1995) : *Towns in the Viking Age*. (revised ed.). Leicester University Press.
- Dodd, Niger (1994) : *The Sociology of Money : Economics, Reason and Contemporary Society*. Polity Press.
(=1998) 二階堂達郎訳『貨幣の社会学』青土社。
- Edward, James (1988) : "The Northern World in the Dark Ages, 400-900," in: George Holmes (ed.) : *The Oxford Illustrated History of Medieval Europe*. Oxford Univ. Press.
- Grierson, Philip (1991) : *The Coins of Medieval Europe*. Seaby (London).
- Grierson, Philip and Mark Blackburn (1986) : *Medieval European Coinage Vol.I ; the Early Middle Ages (5th-10th Centuries)*. Cambridge Univ. Press.
- 堀米庸三 (1976) : 『ヨーロッパ中世世界の構造』岩波書店。
- 堀米庸三・木村豊 (1969) : 「外民族の侵入と中世諸国家の成立」岩波講座『世界歴史』第7巻, pp.287-313。
- Kulischer, Josef (1928) : *Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit* (Erster Band; *Das Mittelalter*). München.
(=1974) 増田四郎監修/伊藤栄・諸田実訳『ヨーロッパ中世経済史』東洋経済新報社。

- 黒石 晋 (1997-2000) : 「欲望のエネルギー論」『彦根論叢』第306, 307, 308, 310, 312, 313, 320, 324号連載。
- 増田四郎 (1974) : 『西洋中世社会史研究』岩波書店。
- Pirenne, Henri (1922) : “Mahomet et Charlemagne,” *Revue Belge de Philosophie et d'Histoire*, 1, pp.77-86.
 (=1975) 佐々木克巳訳「マホメットとシャルルマーニュ」, 佐々木克巳編訳 (1975) 所収。
- Pirenne, Henri (1933) : *Les mouvement économique et sociale du moyen âge*, Paris.
 (=1936) *Economic and Social History of Medieval Europe*. (transl. by I. E. Clegg) Routledge & Kegan Paul.
 (=1956) 増田四郎ほか訳『中世ヨーロッパ経済史』一条書店。
- Postan, Michael M. (1952) : “The Trade of Medieval Europe: the North,” in: M. M. Postan and E. E. Rich eds., *Trade and Industry in the Middle Ages (The Cambridge Economic History of Europe, Vol.2, Chap. IV; 1952)*. Cambridge Univ. Press.
- Postan, Michael M. (1970) : chapter 4 in: G. Barraclough ed., *Eastern and Western Europe in the Middle Ages*. Thames and Hudson Ltd.
 (=1979) 宮島直機訳「東欧と西欧の経済関係」, G. バラクラウ編『新しいヨーロッパ像の試み』所収, 刀水書房。
- Pounds, Norman J. G. (1973) : *An Historical Geography of Europe, 450 B.C.-A.D. 1330*. Cambridge Univ. Press.
- Pounds, Norman J. G. (1974) : *An Economic History of Medieval Europe*. Longman.
- Pounds, Norman J. G. (1979) : *An Historical Geography of Europe, 1500-1840*. Cambridge Univ. Press.
- Plyetnyeva, S. A. (1986) : *Khazari*.
 (=1996) 城田俊訳『ハザール：謎の帝国』新潮社。
- Runciman (1952) : “Byzantine Trade and Industry,” in: M. M. Postan and E. E. Rich eds., *Trade and Industry in the Middle Ages (The Cambridge Economic History of Europe, Vol.2, Chap. IV; 1952)*. Cambridge Univ. Press.
- 鯖田豊之 (1955) : 「いわゆる商業ルネッサンスについて --- ノルマン経済圏の発展と関連して ---」『史学雑誌』第64編・第8号。
- 佐々木克巳編訳 (1975) : 『古代から中世へ —— ピレンヌ学説の再検討 ——』創文社。
- 城田 俊 (1996) : 「訳者解説」『ハザール・謎の帝国』新潮社, 所収。
- Wallerstein, Immanuel (1974) : *The Modern World-System I : Capitalist Agriculture*

and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century. Academic Press.

(=1980) 川北稔訳『近代世界システム』(2冊), 岩波書店。

Wallerstein, Immanuel (1979) : *The Capitalist World-Economy*. Cambridge Univ. Press.

(=1987) 藤瀬浩司・麻沼賢彦・金井雄一訳『資本主義世界経済』(2冊), 名古屋大学出版会。

Wallerstein, Immanuel (1980) : *The Modern World-System II : Mercantilism and the Consolidation of the European World-Economy, 1600-1750*. Academic Press.

(=1993) 川北稔訳『近代世界システム 1600~1750』, 名古屋大学出版会。

White, Lynn Jr. (1962) : *Medieval Technology and Social Change*. Oxford Univ. Press.

(=1985) 内田星美訳『中世の技術と社会変動』思索社。